

子供の情景 佐怒賀正美

叱られてミッキーが好き春の月  
梅咲いて闇がつぎつぎ舌めきぬ  
ちぎれゆく夜の白虹や鬼の墓地  
光年の見ゆる無邪気や春の悲歌  
オーロラは粉砂糖系春シヨール  
絵本から画面から地面からモグラ  
夢想いづこも春で砂丘も旬  
天使その後いたづら盛り春の雪  
ばい菌食ふ猥はるまいか梅の夜  
パンデミック鎮めの邪景春の月

(以上「俳壇」四月号より転載)

# 湖北秋景

佐怒賀正美

菅浦・須賀神社

靴脱いで登る参道いわし雲

台風の日より妖しき淡海かな

稲<sup>いな</sup>滓<sup>し</sup>火<sup>び</sup>の匂ひの残る余呉の湖

太虚あり秋意に寄する周航歌

正妙寺

千手千足<sup>しん</sup>瞋<sup>に</sup>恚の相も秋気澄む

野分雲淡海に垂るるひとところ

竹生島宝物殿・風流陣図

西野薬師堂

秋寂びの掬げたる大笑面の首

秋の淡海われらは俳の風流陣

渡岸寺観音堂（向源寺）

秋思まづ吹き飛ばせとや大笑面

しんがりの野分の雲や奥淡海

湖北あちこち大笑面やさるすべり

上洛は淡海に沿うて葛の花

（「俳句」十一月号より）

# 鶴に始まり

佐怒賀正美

秋暑し七十年談話にこもる鶴ぬえ  
十二支の菓子型磨く夜の秋  
生粋の猫のジゴロや曼珠沙華  
秋の蚊のわが透く傘に入り来たる  
蚊の姥も付くよ鬼太郎茶屋の前  
妖怪の珍うづの父子や夕かなかな  
ひぐらしで目玉おやじの目を洗ふ  
片虹の照りに地獄の奥の院  
あかなめと大下駄眠る秋の屋根  
秋暑し我らヒー族の如きもの  
さるすべり別名エロモドキ初秋  
茶碗風呂に降る秋のさるすべり

秋気不浄ぶるぶるも逃げ来たる  
天敵も妖怪もやすむさるすべり  
一反もめん舞ふ初秋の鐘の音に  
秋や護憲妖怪ぬりかべは味方  
角大師の肋へらへら処暑の雨  
無患子の実の青々と僧よぎる  
翠みづ子地蔵に星河の夢の風車  
黄蝶来る天の表も秋湿り  
人の地にまた降りてゐる秋鴉  
法螺鳴るや献木多き寺の秋  
崖ハケ線の水澄むや唐人客もゐて  
新蕎麦の好きな妖怪たちと我  
新蕎麦を水車の傍に啜りけり

(「俳壇」十一月号より)

## 本態が見える瞬間

佐怒賀正美

昔、「俳句」の写生の特集であったか、私自身の「写生」とは、モノをじっくりと見つめ「本態が見えた瞬間」を把握することであると書いたことがある。しかしながら、本態が見える瞬間は、ふとした出会いから生まれることもある。

もともと野菜や魚の買い物は好きだが、昨年四月に退職してから出かける頻度も増えた。ある日、超季節野菜に満ちているスーパーに足を運び、目に止まったのが空豆。空豆が出るとそろそろビールの出番。そんな初夏の走りを感じるのである。ともあれ、空豆も茹で上がり、あとは塩を振って食す段になって、ふと豆を見ると、緑のつなぎの部分に少し盛り上がった短い黒い筋がある。つるつとした豆の表皮の中で自己主張の感じられる部分である。

一方、その晩、テレビではエジプトの謎に迫る番組を流していた。我が家では、今年二月まで次女が半年ほどエジプトに留学していたこともあり、私自身も大砂嵐はじめけっこうエジプトびいきである。宗教や文化こそ違うが、少なくとも日本に来ている留学生などと接する限りは、皆すっかりしていて人間も情感豊か。だからこそ、昨今のエジプト情勢や周辺国の襲撃事件などを思うにつけ胸が痛む。

私の恩師の石原八束がエジプトを訪ねたのは七十歳頃だった。胆石摘出手術をされた数か月後、たまたま八束宅を訪ねると先生は機嫌がよい。「ちようど、らくだに乗って帰ってきたばかり」と切り出されたので、先年上梓された三好達治伝『駱駝の瘤にまたがって』に因んでのユーモアかと最初は思ったが、「らくだは立ち上がると背中はこの高に」と続けられるので驚いた。三好達治の評伝を書き上げ、無性にらくだに乗ってみたくなったらしい。それも、三好詩の「駱駝の瘤にまたがって」の無頼の心躍りを伴って、エジプトに出かけられたに違いない。日本に来た留学生にその話をしたら、非常に興味をもって感銘してくれた。

話をもとに戻そう。そのテレビ番組の中で、ファラオの時代に話柄が及んだ。ファラオとは、古代エジプトの君主の称号である。そして、強い意志を示すようなその濃い眉を見た瞬間、空豆の黒い部分が思い出された。

空豆にファラオの眉の如きもの 正美

空豆は、地中海、西南アジアが原産地と推測され、古代エジプトでも食されていた。「空豆」が「ファラオ」を呼び寄せたのか、その逆であるかは知らないが、両者はもともと通底していたのであった。いずれにせよ、「空豆」が「ファラオの眉」と出合って、その本態が見えた瞬間に違いなかった。

## 源流

佐怒賀正美

初鴉声を振り抜くごとくなり

エジプトの力士勝ち越せ冬の月

恵方気まぐれ神獣にならぬ猫

舌滑り易く酢牡蠣に歯を立つる

毀れゆく星の無尽や若菜摘む

つはぶきや兜を出でて浮かぶ魂

シリウスや源流いくたびの落差

浴油講続く世なりごろすけほう

うぶすなの始点霜夜の転轍機

指鳴らしつつ狐火と踊りけり

河豚食うて誕辰の父ひとやすみ

朴落葉脱いで魂らしく笑む